2-② 人間の主たる幻想

<人間の主たる幻想>(P43~✔)

-誤った自己感覚が妄想を産む

古代の東洋から伝わった寓話に、羊の大群を所有した金持ちで邪悪な魔法使いというのがある。金のかかる柵をつくるのはいや、また牧童を雇うのもご免という彼は巧妙な工夫をめぐらせた。彼は羊をみんな催眠にかけ、羊

人間も同様、催眠状態に陥っている。幻想は自分のためだと信じこんでいるばかりか、自分が催眠術にかかっているとはつゆ思わない。

人間は夢をみている間はそれらが夢であることを知らないのだ。（荘子）

人間の主たる幻想は、誤った自己感覚である。これがその他もろもろの妄想を産む。人はおれはこうだと思いこんでいるようなものではない。スコットランドの哲学者、デーヴィッド・ヒューム（一七一一～七六）は、「わ

この獲得され工夫されたアイデンティティ、この誤った"わたくし"という感情を放棄することを恐れてはならないと。

この放棄は頭痛を棄てるようなものだ。想像上の"わたくし"は正に大いなる頭痛なのである。

自分は自分がこうだと思っているような人格ではないと疑い始めると、最初のうちはなにか変な胸さわぎがしてこよう。それは無視せよ、なぜならこの不安感を呼びだすのが、偽りの自己のはかり知ることのできないトリッ

かくて議論の余地なく、次のことが帰結される。おのれの理解を正しく使うものは悲哀のとりことはなり得ないのである。（バルーク・スピノザ）

ふつう惰性的に観念されているような自己自身というようなものはないのだから、人間の強さ弱さ、賢さ愚かさ、成功敗北、善悪、その他こうした両極性の属性というものもまた、ないのだ。なにものもわれわれに属しはし

Revision #4
Created 16 October 2024 07:15:35 by ゆう
Updated 13 November 2024 16:16:16 by ゆう